



四万十町
町内「ぶら〜り」散策

茂串町

しげくしまち



茂串町の続き。先月号でも少し触れたが、茂串町には岩本寺の他にも、東光寺、浄照寺というお寺があった。また、文献によれば、戦国期に不二軒庵というお寺もがあったようである。このように、この地区にお寺が集中していたことから、メインストリートであった岩本寺の門前の東西の道を、通称・寺町通といっ

たらしい。

さて、岩本寺は、言わずと知れた「四国八十八ヶ所第三十七番札所」である。その歴史をたどると、もとは五社さん(高岡神社)の境内にあった福円満寺。したがって、はじめは、この福円満寺が第三十七番札所であった。福円満寺は、神仏習合の考えのもと、弘法大師が開いたとされる。理由は不明であるが、福円満寺が、1500年代の中頃に廃寺となる。当時、高岡神社の「別当寺」(べつとうじ)神仏習合が行われていた江戸時代以前、神社を管理するためにおかれていた寺のこと)であった土佐清水の金剛福寺の住職が、高岡神社を訪れる際の宿泊施設として、現在の場所に宿坊を作ったことが、岩本寺の始まりとされている。戦国期の記録には「岩本寺」ではなく「岩本坊」という記載が多く見られる。その後、16世紀末に岩本坊は焼失するが、釈長という僧



高田屋嘉兵衛から寄進された遍路石

によって再興され、この時に岩本坊から岩本寺に改称したと伝えられている。江戸期には京都・仁和寺から住職を迎え、寺領も五石を与えられるなど、岩本寺にとっては安寧の時代が続いた。ところが廃仏希釈で、岩本寺までもが明治4年、いったん廃寺となる。そして18年後の明治22年、ようやく念願の再々興を果たし、今日に至っている。

岩本寺には、八十八ヶ所の札所としての長い歴史を物語るように、さまざまな逸話や、寄進物がある。司馬遼太郎の小説「菜の花の沖」でも描かれた、江戸時代後期の豪商・高田屋嘉兵衛が寄進した遍路石がその代表であろう。また、同じく江戸時代後期を生きた僧侶であり歌人であり書家でもあった清貧の人・良寛。この良寛を生涯支援し続けた「良寛の三大支援者」の一人で、越後の大店であった阿部定珍(さだよし)という人物も岩本寺を訪れた。しかし、道中でかかった病のため、岩本寺門前の宿で急逝。境内には定珍の息子が岩本寺を再訪して建てたとされる供養塔がある。その他にも「弘法大師にまつわる七不思議」なる言い伝えなどを知ると、当時の茂串町界隈の人々の様子や、息づかいが浮かんでくる。

町のうごき

(10月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,289	-16	男 4	13	7	14
女	9,255	-4	女 7	12	13	12
計	17,544	-20	計 11	25	20	26
世帯数	8,586	-8	(10月中の届出)			

窪川地域 12,333人 大正地域 2,491人 十和地域 2,720人

四万十川の 水質状況

	適正値(mg/l)	11月6日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.237
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部